

サン・テグジュペリーにおける

沙漠の意義について

澤

護

キャップ・ジュビーの飛行場長として過ごした13カ月の体験で、サハラ沙漠を恐れることより、愛することを学んだサン・テグジュペリーは、夜中、ランプの火を頼りに書いた150枚ほどの原稿を携えて、沙漠にうしろ髪を引かれる思いで帰国した。これが、彼の自伝的な作品『南方郵便機』であった。

パタゴニアの風と戦い、アルゼンチンで書いた400枚の原稿から150枚の長さに削られた散文型式の作品『夜間飛行』は、彼の第一作と変わらず、英雄崇拜的な調子で、『南方郵便機』での感傷的な敘情はなおも引き継がれている。『夜間飛行』を発表してから作品らしい作品を全く世に問わないままおよそ4年以上の歳月が流れ、リビヤ沙漠遭難という不成功に終わった飛行後に、静かではあるが描写力の秀れた作品が生まれようとしていた。このリビヤ沙漠遭難というサン・テグジュペリーにおける重大な事件に目を向け、彼の生涯にもたらした沙漠の意義について焦点をあててみたい。

沙漠という概念は、不毛で生氣のないところ、人気の全くない嫌なところといった意味でとらえられている。荒漠不毛の沙漠は、水の欠乏、つまり土地の乾燥に基づくものだが、岩石、砂、熔岩といった空虚で不毛性を表わすイメージは、サン・テグジュペリーの作品のいたるところに見いだされる。この不毛性と人間の精神性とを対比させるがため悲劇的な調子を

帯びる結果になっている。サン・テグジュペリーは沙漠に君臨し全く敵のない太陽を、沙漠の乾燥を次のように表現している。

「かくて太陽は沙漠の広がりひろげ『太陽の饗宴』という異名がつけられた。……花々の茎を育むべき太陽は、（逆に）その被造物を焼き尽してしまった。……太陽は地下水の蓄えまでも飲み干し、数少ない井戸水を飲みつくした。また、太陽は砂地の金箔までも飲み干したため、その土地一帯は『鏡』という名がつけられるほど空虚で、空白と化した。¹⁾」

太陽の厳暑を述べ、沙漠の酷さを表した条だが、シナイ山も、ジブチやアデンの巨大な焼けただれた岩肌も、もはや乾燥といった言葉からはほど遠い死の影すらある。スーダンを経てエジプトに流れる雄大なナイル河を離れると、そこにはもう死の色、死の影、死せる静寂しかない。サン・テグジュペリーの思索は、このような風土の中から徐々にではあるが成熟し育っていったのである。体内の水分を一切奪い取ってしまう日中の陽光は、それでも夜には生気を戻してくれる。人の思索も行動をも奪う沙漠での強烈な印象は、そこで過ごす第一夜であろう。太陽が沈むと同時に押し寄せる寒さの驚異であるはずだ。

「老嬢よ、あなたは知っているられますか、凍りつくほど寒い夜、屋根もなければ、ベッドもなく、シーツもなしで眠らなければならない沙漠があるということだけでも……」²⁾

自分の幸せだった子供の頃を思い出し、母に語りかけたと思われるこの文章には、もう沙漠の味を知っているサン・テグジュペリーの姿がある。無数の星が、手をのぼすと払い落せるほどのところで輝き瞬きあっていて、沙漠の生あるもののみに語りかけるのだということを知っている彼にとって、沙漠はもう空虚でも沈黙でもない。彼は数々の体験を通じて、沙漠についてなおも学んでいくのだ。

「サハラ沙漠では、40パーセントの湿度があるというのに、ここリビヤ沙漠では、18パーセントしかない。したがって、生命は水蒸気のように

蒸発してしまう。人は19時間は飲まずに堪えられるが、20時間を経過すると眩しく目がくらみ、最後が始まる。渴きの歩みは電撃のように速³⁾い。」

サン・テグジュペリーは沙漠の中で死と戦いながら、砂狐の姿を見つけ死の尊さを教えられた。沙漠での生活、それは一言で言えば水という宝物を求めて歩くことだと言える。こよなく沙漠を愛した彼がリビヤ沙漠遭難から帰還後には、沙漠の中に隠されている何かを探し求める姿が如実に現われてくる。彼は沙漠の中の井戸を探がし、沙漠で対話し、沙漠で啓示を受けた人間だったが、生きることの意味も、沙漠での死への挑戦から感じとったのである。もはや、死しかないと知ったとき、彼の心には喜びも悲しみも存在しない。

「沙漠、それは僕だ。もうつばを形づくれないし、また、僕が泣くことのできるやさしい映像をも形づくれない。太陽が僕の中で涙の泉を涸ら⁴⁾してしまった。」

しかし、この死の瞬間、彼は砂の起伏の上に人の足跡を見つけ、改めて沙漠が活気づくのを見るのである。沙漠の中での彼のさまざまな行為や体験は、彼の最も美しい珠玉集『人間の土地』や『星の王子さま』に詳しいが、彼は沙漠を常に大きな感動をもって描こうとしている。彼の全作品を眺めると、初期の作品と後のものでは、彼の思想の変化が見られるが、これはリビヤ沙漠遭難をひとつの境いとしている。遭難後の作品は、たえず目には見えない真理の追求、聖なる領域ということしか彼の念頭にとどまらなくなっていた。特に、『人間の土地』『星の王子さま』『城砦』は沙漠が舞台であり、同時に沙漠が動機であった。もちろん、初期の作品もまたサハラ沙漠の土地から生れてきたものであるとすれば、実にサン・テグジュペリーにおける沙漠の意義が大きなものであったかを知ることができる。まして、彼の遺作となった『城砦』は、沙漠の中から生れ、その中で展開されていて、沙漠なしでは存在しない作品であった。この書の中で、彼は

あきることなく美しい沙漠の恍惚を讃歌している。しかし、沙漠の魔力はなおそこにあったとしても、彼の変化と共に昔の沙漠ではなくなっていたし、飛行機の改良にともない、かつての冒険は仕事となり、沙漠の神秘性も次第に奪い取られていったことは作品の上から読み取れる。

サン・テグジュペリーは弟の死によって信仰を失い、許嫁者との別離は女性への愛を忘れさせた。それどころか、神は二度と彼に信仰も、失った愛も与えなかった。しかし、彼はこれら失ったものを、再び沙漠の中で見出そうと努めたのである。彼がキャップ・ジュビーで飛行場長をしていた頃のことを書くきは、常に情熱的でしかも抒情的に歌いあげているのは、彼が沙漠を自分の家とみなしているからなのである。次に引用する文は、彼の第二の幸福な時期であったサハラにいたときのものである。

「僕はサハラが大好きです。そこに着陸しなければならないとき、まわりに見られる砂丘の陰をおとした数々の美しい湖水がとても好きです。おかあさん、あなたはとても幸せな息子をお持ちです。⁵⁾」

サハラ沙漠で、婚約破棄からきた心の痛手を忘れたサン・テグジュペリーは、新たに自分の進むべき道を見出したのである。つまり、この果てしなく続く砂の連続の中で、彼は自己の啓示に向わせ、思索を根源的なものへと向わせたのであった。しかし、時として彼は菩提樹の下を妻と共に散歩し、永遠の砂のかわりに、白い砂利の上をあゆむといった安堵のある生活をも夢みずにはいられないでいる。次に示す手紙は、義弟ピエール・ダゲに宛てたものであるだけに、サン・テグジュペリーとしてはかなりくだけた姿勢を見せている。

「誰かうっとりとするようなひとを僕に見つけて下さい。そうすれば、僕は人類の改善に貢献できて嬉しいでしょう。彼女が金持なら、持参金から分け前をあげよう。もし彼女が美人なら、分け前は……、いや、それは駄目だ。君は色魔すぎるから。⁶⁾」

サン・テグジュペリーが青春の一時期を過ごしたキャップ・ジュビー

サン・テグジュペリーにおける沙漠の意義について

は、一方は海に面し、他方はサハラ沙漠に接したリオ・デ・コロにあって、スペインの植民地でありながら、そこに住むアラビア民族は決して服従することのない不従順民族であった。彼はこの地にスペイン政府と接触すること、いかなる時刻、いかなる天候、沙漠のいかなる場所であろうとも、飛行士が危険な状況にあれば救援におもむくという指令の下に派遣されたのであった。ここにあっては、ひとたび飛行機が不時着すると、物資の掠奪があり、塔乗員が虐殺されたり、人質として塔乗員を捕えては過大な武器やラクダとの交換を強いる狂暴な民族がいた。再三にわたって、サン・テグジュペリーは飛行機事故で行方不明になった同僚を救助するため、この不従順地帯に向わなければならなかった。一年に数回しか雨が降らない、しかも夜の厳しい寒さの中で、彼は少しずつ沙漠の起伏、砂丘、足跡、井戸を記憶にとどめ、同抱愛や人間愛といった尊い教訓を学んでいった。

「サハラのどこかで行方不明になった二機の郵便機を探索するのに、ここでは大騒ぎです。仲間の一人は捕虜になっています。ぼくは五日間の間、飛行機から降りませんでしたし、ぼくたちは実にすばらしいことをや⁷⁾ってのけました。」

沙漠の中での捕虜の救出、飛行機救難作業、行方不明の同僚の探索などは危険が重なっていただけに、彼にはすばらしいこととをやってといった感覚を与えたのだろうが、それ以上にここから人間の絆をますます豊かにしていくものであった。サン・テグジュペリーの作品の中で、人間への愛はどこでも讃歌されているテーマであって、沙漠の生活から彼は人間の救済を知り、不従順地帯にいるアラビア人との接触から彼らを改宗せしめるべきだと悟り、彼ら異教徒からも人間性を発見したのである。

サハラ沙漠の様子は『南方郵便機』『夜間飛行』に詳しく描写されており、ここで語られる大きなテーマのひとつに愛がある。この愛は職業的な愛で、「愛されようとするには、同情さえしたらいいのだ⁸⁾」といった論旨

が繰り返して述べられている。しかし、サン・テグジュペリーは同情することを努めてさげようとしている。危険な夜間飛行には、同情や友愛を示すことは禁物だことを、彼はよく知っているのだ。ある種の同情のため、尊い人間の生命を犠牲にする場合が多いからなのである。しかし、夜間飛行に飛び発せようとする上役と、夜の征服に向う操縦士との間には、強い目には見えない友情の絆で結ばれていることも彼は誰よりもよく知っていた。

『南方郵便機』では、われわれの手のとどかない面、つまり精神的なものへの探求をテーマにした作品だが、この中に登場する主人公に危険な使命を与え、死に追いやる憧憬を描き、彼が非常に傷つき易い人物であるだけに、サン・テグジュペリーのロマンティスムや幸福感があちこちに顔をだしている。ところが、次の作品『夜間飛行』では、なぜこの危険な飛行のために生命の危険を冒す必要があるかを考え、人間は己れの生命より価値あるもの、さらに永遠性のある救われるべきものが人生にはあるのだと説くようになる。これがもしないとすれば、人間の行為は全く意味をなさないとは彼は主張するのである。ここでもうすでに、沙漠の無限の広がり、サン・テグジュペリーの心をゆさぶったことに気がつく。沙漠という世界では生活のリズムが全くないだけに、何の変化もないまま単調な時間の中で時が過ぎ去ってしまう。この修道僧のような生活の中で、彼は孤独と焦躁の気持を抱きながら、自分の幼年時代を回想し、幸福な家庭生活を夢みる時があっても、なんら驚くにあたらない。

「何処とも知れないところに、黒松と菩提樹の茂った庭園があり、ぼくの愛する古い家があった。……この家のおかげで、ぼくは砂浜に墜落した肉体ではなくなっていた……」⁹⁾

サン・テグジュペリーが、サン・モーリス・ル・マンの家を思い出すのは、ともかくも暖かな幸せにつつまれた家庭生活から全く離れていたからであり、沙漠ではいつも幼年期の回想が頭をかすめる。このためか、サハ

サン・テグジュペリーにおける沙漠の意義について

ラ沙漠で彼はカメレオンやフェニックスという砂狐を飼いならすことに専念したり、異教徒の改宗を試みていた。まだ二十台という若さで、彼は自分の最も愛好した言葉「飼いならす」(apprivoiser)と「改宗させる」(convertir)の下絵を描いていたわけである。この二つの言葉は、彼の作品のあちこちで取り扱われているが、これも沙漠の沈黙から生れてきたものであった。さらに、沙漠は彼に神を思い出させた。神は彼にとって実在していようがまいが、また、神は人間によって創りだされたものであろうが、神に向って祈り問わなければならない気持ちにさせた。キャップ・ジュビーでは、彼の大きな問題であった神への概念、神への郷愁が、いつも頭の中で現存し、それが若くして失ったものだけに、常に立ち戻らなければならない現点ともなっていたのである。

「ぼくらは、(この沙漠という、この)スポーツのルールを受諾した。このスポーツは自分の姿に応じて、ぼくらを形ち作ってくれる。サハラ沙漠、それが姿を現わすのはぼくらの内においてである。沙漠に近づくということ、それはオアシスを訪ねるということではなくて、泉をぼくらの宗教にするということである。¹⁰⁾」

サハラ沙漠の生活は、ただ夜空に美しく輝く星のみが、沙漠にいるものに距離感を与え、あとは沈黙と寂寥の中で、楽しかったことの思い出に、なつかしい恋人に、失なったものに、そこに住むものを追い込むのであった。

サン・テグジュペリーの神の観念は、生涯彼にまとわりつき、彼の脳裏から離れることはなかったが、彼の作品中に神なる言葉が初めて現われるのは、『戦う操縦士』からである。彼は戦いが明かに敗北だと知りながら、単に上司の命令ということだけで、アラス上空への偵察飛行に飛びたたなければならないとき、「神」について、また「人間」について語り、「神」と「人間」との関係を解きあかそうとする。

「わが文明は、「神」より受け継いで、人々を「人間」において平等な

ものとした。¹¹⁾」

このような表現は『戦う操縦士』の末章で、あきることなく繰り返して述べられている。ここでは、「人間」を時には大文字で、またある時には小文字で表わしているが、その使い分けはまだ明確に説明できるところまではしていない。しかし、言葉では表現しにくいがとしながらも、サン・テグジュペリーは「人間」は人々と同じではないといった意味を語っている。失われた神を見出そうとしてか、「神の継承者であるわが文明は……」とか「わが文明は……」ではじまる彼の信条はながながと続く。おそらく、サン・テグジュペリーは長かった旅の終りにたどりついた気持ちから、この信条を書き加えたであろう。この点は、『城砦』の中でさらに展開され、明瞭になっていく。つまり、サン・テグジュペリーは、人間関係を個人を超越した「人間」尊重の上に築こうとし、この「人間」は神の様相をして、人間（人々）の中に現われる姿なのだとする。「神」の愛は人間をお互に責任あるものとし、希望を義務づける。なぜなら、絶望は自己において「神」を否定するからである。愛は、神の内において人間を結びつける絆であり、人間が愛によっておのが心を満されるとき、おのが姿に見出す「存在」が「人間」なのである。この神の尊厳を「人間」の尊厳に置き換えるといった精神は、いつ頃サン・テグジュペリーを捕えたのであろうか。ジャン・ユージェは1936年、つまりリビヤ沙漠遭難後からだとし、¹²⁾『人間の土地』の『沙漠の真中にて』の章から引用し言及している。また、アンドレ・ルッソオは、「それからというものは、その聖なる領域の中で可能な限り前進するということを除いては、もはや何ものも彼の心に留らないでいた」¹³⁾と、リビヤ沙漠遭難後のサン・テグジュペリーの姿を語ったが、これらの見方は正しい。

リビヤ沙漠遭難についてかいつまんで述べておこう。この遭難は初めから予期されていたものだった。おそらく当時の飛行機製造、改良の奨励からであろうが、長距離飛行に対して賞金がかけられていた。つまり1935年

サン・テグジュペリーにおける沙漠の意義について

12月31日までにパリからマダカスカルまで最短所要時間で飛んだ者には50万フラン（約3万5千ドル）の賞金が、また、パリ・サイゴン間のそれまでの記録、5日と4時間を更新した者には15万フラン（約1万ドル）がそれであった。¹⁴⁾この頃のサン・テグジュペリーは全くの文なしで、自分の財政的うるおいのために、後者パリ・サイゴン間の記録更新を企てた。もちろん、金銭的には50万フランの方が魅力であったが、前の年に彼はパリ・サイゴン間の往復飛行に成功していただけに安心感もあり、また愛機「シムーン号」をもってすれば、長距離飛行の新記録を必ず達成できると確信し、この年も終る12月29日朝、ブルジェ空港を飛びたった。彼は地中海を横断し、途中で給油のためベンカジに到着し、夜10時30分リビヤ沙漠を夜間翔破するためカイロ方向へとさらに向った。4時間5分の飛行後、彼はナイル河を飛び越したと思い、コースを変え下降した。事故はこの時に起ったのである。飛行機はリビヤの砂丘に衝突したが、サン・テグジュペリーと機関士プレヴォは全く奇跡的にも無傷のまま暗夜の沙漠に抛り出されただけであった。この二人に残されていたものは、僅かばかりのコーヒーと果物だけで、あとは酷熱の太陽、無限の砂、夜の寒さ、渴きだけであった。このリビヤ沙漠遭難の様子は『人間の土地』に詳しく、この事件を境として彼の作品はさらに密接な関連をもっていった。愛の絆、責任感といったものの確認以外に、人間、神のテーマが彼の脳裏から決して離れることがなくなっていく。われわれはリビヤ沙漠遭難を契機として、サン・テグジュペリーの思考、人間のあり方といった内面の転換を観取できるがゆえに、このリビヤ沙漠遭難の意味は過少に取り扱われるべきものではないと思わざるをえない。特に、神の問題、宗教的な文明の問題は、1936年から1944年にかけて書き綴られた『手帖』の中で見られ、彼の思想の推移を知ることができる。この面での裏づけに、ペリシェ博士の証言「もし、ぼく（サン・テグジュペリー）が信仰を持つことができるのなら、ドミニコ会に入りたい。だが、信仰がないのにドミニコ会に入るわけにはいかな

15) 』があり、ルネ・ゼレールもサン・テグジュペリーが修道僧と神について一晩語り明したことを記述している¹⁶⁾。どちらの証言も1938年のことだとしているのは興味深いことである。

リビヤ沙漠遭難から、失なわれた信仰へと再び近づくことが認められるが、神なる概念は、すでにキャップ・ジュビーにいたとき彼の胸の内に刻まれていた。風とはげしく抵抗しながら飛んでいる飛行機は、ただ時間の中だけを進んでいて、そこで重苦しい息苦しさを感ずき、しかもますます重くのしかかる別の世界のあることを知る。機体があわや砂丘につんのめりそうになったとき、前方に見える「黒い岩」が寄り集まって静かに近づいてきた。ところが、彼が今まで岩だと思っていたものは、急に風に吹き飛ばされてしまうのである。

「何でもなかった。ただの黒い岩でしかなかった。ぼくはこの沙漠をひどい目にあいながら飛び続ける。ひとつひとつの黒い点は、ぼくを苦しめる過失なのだ。だが、沙漠はぼくの方に黒い岩だけしか転がさない。……やっぱり、黒い岩だ。」¹⁷⁾

『南方郵便機』にある、この「黒い岩」はサン・テグジュペリーにつきまとっている神の概念の象徴とみなしえる。さらに、リビヤ沙漠で墜落した彼が、暑さと渇きとで死線上をさまよい歩いているとき、蜃気楼のように一人の男が砂丘のかなたに現われたのに気がつく。ところが、その男に近づくとき、たった今まで身振りをしてきた男は、黒い岩に姿を変えてしまうのである。これは、太陽と疲労とに基ずく彼の眩暈のためだったのであろうか。「黒い岩」の思い出、それはリビヤ遭難でも見だした神の象徴に他ならない。リビヤ沙漠遭難後、サン・テグジュペリーは五つの作品を発表し、それら全てが密接に関連を有していることは、『城砦』が他の作品の母岩であることから知れるが、彼の思想の中核をなす「神」に基因しているといえよう。先の「黒い岩」は、さらに『城砦』でも登場する。

『城砦』の語り手は、黒い岩の近くで想いをはせらせ、神に向ってその存

サン・テグジュペリーにおける沙漠の意義について

在の証となるものを与え給えという。その黒い岩からほど遠くないところに、一羽のカラスが枝にとまっていた。もし、そのカラスが飛び立ったら、神が存在する証だと考えた。ところが、カラスは飛び立たなかった。ここで、語り手は考えをかえ、神が自分に証拠を与えるものであったなら、それはもはや神ではないのだと自分にいい聞かせる。つまり、神が人間の水準にまで自らを引き下げるのであれば、神はもう超越者ではなくなる。したがって、神とは、神が神である限り、必然的に沈黙なのだと言語手は悟るのである。

この一種の寓話とも思える話しは、サン・テグジュペリーが神の啓示を信じる信者でないことを示しているものだともいえる。確かに、『手帖』でもうかがわれるように、彼が失われた信仰を取り戻し、キリスト教に復帰したと考えることはできない。しかし、彼の作品にも精神にも神への歩みは見られる。神への歩み、それは沈黙の中にあることを知っていたサン・テグジュペリーにしてみると、先に掲げた寓話は彼の心の惑いであったともいえるのではないのだろうか。

「沈黙のうちにのみ、ひとそれぞれの真理は実を結び、根をおろすものである。」¹⁸⁾

沙漠の中で展開する『城砦』の舞台であるが、サン・テグジュペリーがアメリカ、アフリカ旅行の折にもこの原稿を肌身はなさず持ち歩いていただけに、これにかける彼の期待は大きなものがあり、思索の場所を沙漠に設定したのは当然であった。彼が貴重な体験をしたサハラ沙漠やリビヤ沙漠での追想が理念を扇ぎたて、沙漠にその場を求め、己れの城砦を人間の心に築こうとしたのである。神の啓示を受けたのが沙漠の中でなら、人間の絆の意味を悟ったのも沙漠にてであった。職業の強制、規則に厳しく従わなければならないということは、人間同志の信頼感を増すものであり、職業は人と人との親和をもたらす点に偉大さがあることも、サン・テグジュペリーは知っている。

「職業の偉大さは、おそらく何よりもまず、人間を結びつけるということである。それは真の贅沢というもので、また、人間関係の贅沢なのだ。¹⁹⁾」

この考えは、人間同志の友愛さを自分自身の体験に基づいて生みだした所産だった。したがって、不従順地帯で遭難した同僚を助けるため、数限りない危険を冒しながらも救出に向うのは、この救出作業の美しさと、その喜びとを知った者でなければ容易に理解できないであろう。

「サハラ沙漠の救出作業という大きな喜びを知ったわれわれのうち²⁰⁾あっては、他のどんな喜びもほんのかりそめのもの²⁰⁾としか見えないのだ。」

救出に向うときの雄々しい姿のサン・テグジュペリーは、同じ目的を持った同僚への愛を豊かにすることに喜びを感じていた。先に引用した『人間の土地』の一節より、母へ宛てた便りはさらに一層明瞭にこの点を語っている。同胞に対する愛は、彼の職業から生れ、人間の情熱をかきたてる所産であって、お互の協力により、お互のうちに芽ばえる友愛でなければ、何ら期待するものではないのである。だからといって、友愛の条件は平等かといえれば決してそうではなく、友愛は階級的秩序の報償なのだとする。なぜなら、平等とは神の前においてのみ価値があるものなのだからである。サン・テグジュペリーの愛するもの、それは危険な使命をおびた者に対してではなく、彼らの有する生命になのである。

「生命を軽んじるように進めるのが問題なのではなく、おまえたちにとって、生命を愛させようとする²¹⁾ことが問題なのだ。」

サン・テグジュペリーの場合によく問題にされる同胞愛は、彼の子供の頃の回想と同一線上にあると思われ、家への安らぎから引きだされ、それが真の協同体の意識へと展開していく。そうして、人間は精神的なものへと上昇していくものだと考えている。ここではもう見えざる神をはっきりと意識しているのである。

沈黙について今少し考察してみよう。ひとりひとりの人の真理は、沈黙

サン・テグジュペリーにおける沙漠の意義について

のうちにのみ開花するもので、その沈黙が、男の沈黙でも、女の沈黙でも、また、心の沈黙であろうと、思考そのものの沈黙であろうと、感覚の沈黙でも、言葉の沈黙でも、神を再び見出すのは永遠のうちなる沈黙になのである。この沈黙とは、今まであまりにもしばしば忘却してきた神や、新しいなんらかの存在を熟慮し讃えるためのものなのである。サン・テグジュペリーが讃歌した精神主義——あらゆるところに精神は内在し、精神は重要なものだとする信条——といったものに動かされるものの精神の広がりも、また沈黙なのである。沈黙を望み求めていたサン・テグジュペリーに重くのしかかるようになっていったもの、それは孤独という重みで、彼はこの重みに耐えられなくなってしまう。この孤独とは、彼がひとりであるときに押し寄せてくるものではなく、たとえ群衆の中にいても、自分がどこにいるのかさえも分からなくなってしまう空虚である。この孤独から逃避するためには、もう祈らずにはいられなくなってしまう。自分がひとりであるときには、もうなんの意味をも持っていないことを知って、彼は神の一部に拘束されたいと願うのである。

「主よ、私は実際に目に見え、実際に耳に聞こえるものを与えてくださいと申しているわけではありません。あなたのもたらす数々の奇跡は、決して感覚のためのものではないのですから。私の心を癒してくださるためには、私の住いの上で私に精神を照してくださるだけで充分なので²²⁾す。」

さらに、筋のない、聖書的な文が繰り返す。

「主よ、私が己れを知るためには、あなたが私の胸のうちに苦悩の錨を打ち込んでくださるだけで充分なのです。……主よ、私の属する樹木に再び私を結びつけてください。²³⁾」

なんと数限りなくサン・テグジュペリーは孤独のうちに神に祈っていることであろう。もし彼に、彼の孤独が終ることがあるとすれば、「事物を通して読みとるすべ²⁴⁾」を知ったときであろう。なぜなら「孤独とは、精神

が弱いときに、その精神から生れる²⁵⁾」ものなのであるからだ。『城砦』を通してわれわれが知る神は、サン・テグジュペリーが晩年に語った自分の生きる場所はソレームの修道院だとの言葉があるとしても、キリスト教の教える神ではない。精神によって読み取ることができる神がそれである。

孤独と沈黙のうちで、神との出会いを啓示された場所が沙漠の中でなら、母への、妻への、同胞への愛を確認したところも沙漠の中でであった。沙漠は、外見には空虚と沈黙と死の影を漂わせているかのように見えるが、それは沙漠がかりそめの、沙漠に愛を見ださないものには、身をゆだねないからなのだ。沙漠が単に砂によってできあがっているものではなく、そこには井戸という心にはよい沙漠の恋人が隠されているのをサン・テグジュペリーは知っていた。その井戸が、逆に沙漠を恋人に変えるということも。

サン・テグジュペリーの作品でも、最も美しく描かれた『人間の土地』の『沙漠にて』あるいは『沙漠の真中にて』で、彼は自分の乗った飛行機が沙漠に墜落したときの模様を実に生々しく描写した。沙漠の熱風は容赦なく体内の水分を奪い、この渇きから逃がれようとパラシュートの一部を切り取って朝露を集める。しかし、結果は失敗に終り、蜃気樓がかもしだす泉の方に、それが偽りの泉だと知ってはいながらも、自然と足は向いてしまうのである。それまで、サン・テグジュペリーはこれほどまでも泉の捕われの身であることを知らなかった。

「人間は、己れを井戸につなぐ縄、臍の緒のように、人間を大地の腹につなぐ縄を見ずにいる。井戸から一歩たりとも遠ざかったなら、人間は死んでしま²⁶⁾う。」

『城砦』では、この渇きの意味を理解することができる。太陽が焼けつくように輝きだすとき、蜃気樓がたち、整然とした街の姿がくっきりと静かな水面に映っている。渇きは、常に泉や井戸や湖のような蜃気樓を立たせるものなのである。やっとのことで見つけだした井戸に『生へ開いた

窓』と彼は名付け、「渴きは、水に対する病気そのものより、水に対する苛酷な嫉妬である²⁷⁾」という。なぜなら、自分の肉体を癒すがごとくにそれを求めるからなのである。渴いたおり、自由に井戸に向かい軋むつるべを引き、重い桶を上げるという行為は、単なる足どりと、腕と、眼とで渴きを癒したのだとする。井戸に向かう歩みは、渴きに苦しんでいたものに心を癒し、満ちたりた気持を与えることのほかに、水を得る歓きとは別の力を目覚めさせると考えている。だが、そこにはいつも神の助力が必要であり、同時にここから神への讃歌が生まれてくるのである。

「乾燥した種子に注がれ、水を得る喜びがなければ己れについて何ひとつ知らないものに、この水は町や、寺院や、砦や、中途はんばだった大庭園を作りあげる人知れぬ力を目覚めさせるのです。……大麦の畑も、エル・クスールの井戸も、わが部隊も、銃眼に守られた都市が星空のもとで築かれるのをそこで読みとれるあなたの現存がなければ、私はそこに雑然たる素材の山しか見だせないのです。²⁸⁾」

『城砦』のいたるところで井戸や泉の意味を知ることができるが、この沙漠の中で秘やかに息ずいている井戸や泉は、人間が期待していなかった贈物であっただけに、これを発見したときには喜びでおもわず立ちすくんでしまうほどのものだった。この瞬間、なんのためによるものか説明はできないまま、突如として神の現存を感じるのである。泉に満されようとする願望は、この泉に一步一步と近づくにつれ、ますます神への歩みを示すものにほかならなかった。

サン・テグジュペリーは神への信仰を失ったが、リビヤ遭難後の作品では神への接近をうかがわせる。砂丘に座り、想をめぐらした沙漠のどこかに隠れている井戸を求める彼の姿には、神の思寵を求める象徴がある。沈黙の中でなにかの輝くのを見たサン・テグジュペリーは、そこに神との愛を築きあげたいでいるのだ。だが、感受性の強かったときに起った弟の死は、あまりにも深く神との別離という悲哀を築きあげてしまっていた。だ

からといって、おもいきって神を忘れさることもできずに、神との別離に苦悶している。それは、サン・テグジュペリーが神の不在は、神なき世界よりもまだ心安まることを知っていたからで、この不在は決して大きな断層でも、永遠の不在でもないことを、よく知っていたからなのである。

サン・テグジュペリーの宗教上の不安は、彼の第一作『南方郵便機』から認められるが、リビヤ沙漠遭難後の作品ではますます明らかになっている。彼における沙漠の意義は軽く評価されるべきものではない。彼の思想、作品、生涯のどれをとっても、愛が舞う家の概念と沙漠は根本的問題であり、正しく認識されるべきものである。「愛がなければ、生きるすべを知らない。私は愛によってのみ語り、振舞い、書いた²⁹⁾」と語るサン・テグジュペリーの愛の概念も、交換・永遠性の観念、儀式・規律の観念と同様に神の理念と密接に結びつき、ひとつの体系を創りだしている。これらの面に触れるとき、われわれは沙漠のもつ意味を考慮に入れなければならないであろう。なぜなら、彼の精神は沙漠の中で成熟したものなのだからである。

注 1) Citadelle, œuvres, p. 510

2) Terre des Hommes, œuvres, p. 179

3) id., p. 225

4) id., p. 240

5) Lettres à sa mère, p. 181

6) id., p. 179

7) id., p. 187

8) Vol de Nuit, œuvres, p. 110

9) Terre des Hommes, œuvres, p. 178

10) id., p. 187

11) Pilote de Guerre, œuvres, p. 374

12) J. Huguet : Saint-Exupéry ou l'enseignement du désert, p. 237

13) A. Rousseaux : Littérature du XX^e siècle, IV, p. 45

14) C. Cate : Saint-Exupéry, His life & times, p. 287

サン・テグジュペリーにおける沙漠の意義について

- 15) G. Péliissier : Les Cinq Visages de St-Exupéry, p. 128
- 16) R. Zeller : La grande quête d' Antoine de St-Expéry. pp. 209-210
- 17) Courrier Sud, œuvres, p. 75
- 18) Citadelle, œuvres, p. 544
- 19) Terre des Hommes, œuvres, p. 158
- 20) Id., p. 252
- 21) Citadelle, œuvres, p. 791
- 22) Id., p. 779
- 23) Id., p. 869
- 24) Id., p. 780
- 25) Id., p. 779
- 26) Terre des Hommes, œuvres, p. 237
- 27) Citadelle, œuvres, p. 604
- 28) Id., p. 837
- 29) P. Chevrier : Antoine de St-Exupéry, p. 261